

## 海南島調査記

松尾弘

## 序

廣東建設廳瓊崖實業局長朱赤竟が廣東省政府建設廳長宛に民國二十四年三月二十六日附で呈出せる海南島の英支鐵道借款計劃書（擬借英庚退款建設瓊崖環軌鐵道計劃書）中の冒頭に「瓊崖即ち海南島は橢圓形の巨島にして中國最南部の大海中に孤立し、氣候溫暖、土地肥沃、環海には漁鹽の利あり、内地には農鑛の産多し」と述べて居る如く、支那で刊行されたこの本にも「海南島は土地廣く、人口稀薄、然も其の土地肥沃にして物産の豊富なること國內稀に見る所なり」（中山大學刊行、瓊崖各縣農業概況調查報告中）と云ふのが極り文句で、日本で發行された海南島に關する本亦皆之に倣つて同様の事ばかりを書いて居る。即ち海南島は、椰子あり、護謨あり、米は三度とれ、眞に是南海の寶庫であるといふのが一般の宣傳だつた。扱て皇軍に占領されてから、實地に就て夫々の専門家から夫々の立場に據り、可能な範圍内で調査が行はれたが、寶庫といふ文字通りの島であるかどうかには疑問が生じた様だ。中には同島の北の方を一寸ばかり見て、農業的にも海南島は駄目だといふ氣の早い人迄あつたが、筆者は同島の實情に觸れ、一般的

資源狀況及びその開發の可能性を實地見聞によつて判斷し、併せて今後の開發に伴ふ問題を捉へて、之を吟味せんと  
の意圖の下に、今夏（昭和十四年）七月下旬より八月半にかけて海南島へ出張した。然し實地に見た所は全海南島の  
地域から見ると甚だ僅少で、即ち北部方面は、海口、瓊山、文昌、清瀾を、東部方面は蓬萊、黃竹、大路、山竹を經  
て僅に嘉積を、南部方面は三亞、榆林、籐橋、新村、陵水、石門嶺、及び崖縣邊りを、西部方面は海から北黎港を眺  
めたるも陸地の狀況は一切分らず、定安、澄邁、那大方面は遂に出張日數の關係より見る事なくして終つた。從て如  
何なる點からも海南島の價値判斷をするには見聞狭く、尙その上に淺學菲才の筆者としては其の資格を缺いて居る譯  
であるが、集めた資料と、乏しい見聞とを綜合して、一つの貧しい調査記をものしてみた。以下が其の調査記である。

## 一 總 論

先づ海南島の地理的な特徴から述べるならば、

- (1) 南支那海の一大孤島で熱帯に位し、
- (2) モンスーンの定期的襲來地域に在るが、
- (3) 北部一帯は水利の便惡き爲め樹木の少ない廣大な大草原叢林帯で土地は波狀形丘陵をなして割合に高く、地味  
は一般に瘦せて居るが中央より稍南寄りの大五指山を中心に四方に走る緩かな山脈及び丘陵の發達せる所には河  
川の流域に地味も相當に肥沃な所が多い。

(4) 然し河川は比較的大きいが其の殆んど總てが河口に近くなる程沙泥堆積して水深淺く、僅かに帆船を用ひて往

來し得る程度で水運状態は極めて悪く、

(5) 道路には多少見るべきものもあるが鐵道は一本も無い。そして海岸線は割合に單調で良港に乏しい。

其處に二百萬人の概して文化の低い人間が住んで居て、それらの人々が海南島と稱する交通比較的不便な約三萬五千平方料の特有な場所に農を主として生活を展開して居るが、一平方料當り密度五十七人といふ割合に餘裕のある土地と割合に稀薄な人口とを有するも、島民の經濟は極めて貧困である。

それは云ふ迄もなく宣傳程に海南島が恵まれて居ない事にもよるが、より根本的な點は島民の自然利用に對する知識の貧困であり、唯徒らに自然より收奪する事のみしか知らない事實に基づくのである。

扱てそこで、

第一 海南島に産する或生産物の産額が、廣く世界の全生産額中重要な地位を占むるもの一つでもありや否やと云ふ事になると、是は一つも無い。

第二 然らば海南島の島だけに限つて何が最も多く生産され、且つその量に於て最も優れて居るか。此の問題になるとそれは米であり、次が甘蔗である。

序でに海南島に現在生産されて居る主なる生産物を列挙してみると、

米、甘蔗、薯類、豆類、椰子、檳榔、西瓜の種（食用）、バナナ、麻類、護謨、マンゴー、パイナップル、水牛、黄牛、豚、家鴨、雞、牛皮、天蠶絲、魚類、鹽、錫等（註、以上の産物を見ても分る通り主として食糧用品である。島

民の被服用品たる綿製品、點燈用其の他の燃料に用ふる石油類等は總て島外から輸入するのであり島内には全く産しない。）

であるが、何れも量が少なく、到底對世界生産は勿論だが、東亞の生産に於てさへ餘りに貧弱な量でどれ一つ海南島を特徴付ける産物は無い。米の如きは島民の最重要な食糧品でありながら、現在の所島内自給自足さへ出来ない。唯天蠶絲の生産は世界最大で、世界の供給を一手に引受けて居る有様だが、之は其の産額が、米、甘蔗に比すれば、問題にならないし、まさか海南島を以て天蠶絲で財政を建てるなど、云ふ譯にも行くまい。

だが以上の觀察は、海南島が非常に粗野な自然状態の色彩濃厚なことを示すのであつて、將來も亦然りとして悲觀説を立てる材料には決してならないのである。

然らば我々は、海南島に對し産業的に何を期待すべきか。あらゆる生産物は皆自然と人間との交互作用の結果である。だからして先づ海南島といふ島に與へられた自然的諸條件は、海南島生産物發生の第一條件である。然し我々の文化即ち生活状態の進歩と云ふ事が、其の産業的側面に於ては、一に人間の自然に對する支配の發展にあるのだから、自然的諸條件だけでは、人間の産業を手段とする經濟生活に何等の關聯を持つに至らない。人間が自然へ向つて働きかけて、其の自然の中から色々な物を引出さんと努力してこそ、始めて色々な生産物が生れ、我々の經濟文化の進歩がある。けれども然し、生産物の豊富なる作出にはそれを援ける科學的知識、技術、資本、豊富低廉且つ良質なる勞働力等あらゆる條件が具はらねばならない。即ち自然的條件に加ふるに人間的（社會的）條件が相伴つて、此の双方の間に有機的な相互作用的調和が行はねばならないのである。故に海南島から石油を獲得せんと欲しても、若し之が埋藏されて居ないとすれば即ち自然的條件に於て缺如して居る場合には（之は實際に調査の濟む迄は斷定的に云へない言葉であるが假に斯ういふ事に定めて置けば）、海南島からは石油の生産が望めない。反對にいくら石油があつて

も人間が獲得せんとする努力をしなかつたら石油は全く生産されない。故に我々は海南島の自然的側面の調査研究を先づ進め、之に基づいた自然の中からの生産物の引出を組織的に計画的に行ひ始めてこそ、其處に農業とか、鑛業とか、商業とか、工業とかを發展し得るのであると云へる。だが前述の通り、たとへ自然的諸條件はよくても、働きかける人間が低級では到底文明人と同じ様な經濟的成果は舉らないから、今度は人間的側面即ち社會的諸條件の調査研究をも行はねばならなくなる。それ故に海南島を眞に寶庫となすものは、其の基礎が海南島の自然的條件の中に先づ求められねばならぬが、それと共に高い科學的、技術的、又資本的條件を有する様な文化水準の高い人間が働きかける事を要する。從て新海南島の建設には、日本人を中心にして同島の全住民が強力なる精神的基礎の上に、よく協力して、物質的基礎を築く爲めに生産の途へ勵んで貰はねばならぬのである。

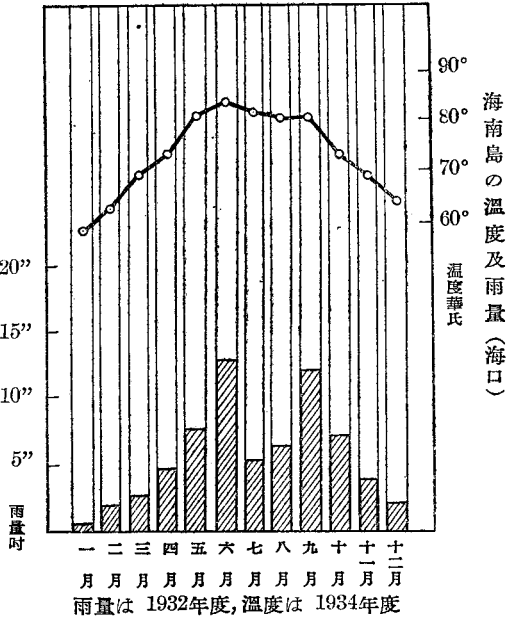
以上の如き觀點から海南島の調査記を行ふのであるが、此處には筆者の資料蒐集及び研究の不充分と云ふ點もあるが、主として與へられた紙數制限の關係に依り、經濟地理的立場から自然的側面のみを概略を記するに止める。

## 二 氣 候——地理的位置

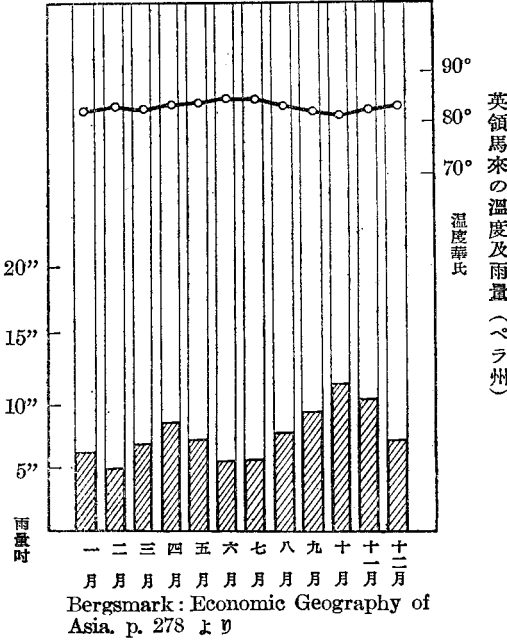
海南島の地理的位置等に就ては、筆者がこゝに詳しく述べずとも、卷末に附した参考書類にいと詳細に書いてあるから之は略する。唯こゝに筆者の述べ度い事は、其の地理的位置の故に有する氣候の特徴的型である。之も簡単に云ふと、海南島は熱帶の、夏は西南季節風帶、冬は東北季節風帶の支配する圈内に在つて、所謂亞細亞的氣候の特徴たるモンソナル・ランド (Monsoonal land) に屬する。そして英領馬來邊りの赤道無風帶 (北緯五度と南緯五度と

海南島調査記

米、甘蔗型（冬に乾燥期のある點に注意）



護謨栽培に最適型（温度及雨量が著しく平均して居る點に注意）



の間）の純熱帯とは、熱量、雨量（特にその分布状態）、風等に於てかなり相違した點があり、之は純熱帯作物栽培上に於て赤道無風帯程の好條件が得られないと云ふ事になつて居る。一例を挙げれば、海南島の護謨栽培は既にその自然的地理條件に於て英領馬來半島の三分の一（無論之は極く大ざつばな云ひ方だが）の不利なハンディキャップがあると云ふ事は云へるのである。其の例證として兩者の雨量分布を見ると次の如くなつて居る。

所で海南島には雨量統計、氣溫統計に就き海口以外には頼りになるものが、多分無いのだらうとは思ふが、發表せられて居ないから、北だけの統計を見て南の三亞方面及び東の嘉積、西の那大方面迄同じと見るは危険であり、右に述べた事は實地に基礎調査の濟む迄は分らぬではないかと云ふ論もあるだらうが、海南島の占むる地理的位置と其の地形とからする判断では、海南島は南程モンスーン型が北よりも顯著でなければならぬ筈である。即ち亞細亞のモンスーン型である六、七、八、九月即ち夏に雨量が最も多くて、十二、一、二月即ち冬には雨が餘り降らないと云ふ事になる筈であるが、之は中山大學刊行の「瓊崖各縣農業概況調査報告」の氣候の所にも明瞭に其の事實が述べてあり、「猶、本島の南部地方では、毎年十一月以後、翌年の三月以前の期間には、極めて雨量に乏しく、往々にして一滴も降雨する事がないやうである。」(陳新座氏譯)と明記してある。従て雨によつて生を享けて居る海南島の人間は斯る氣候的要素の中に海南島の、廣く云へば亞細亞型或は「太平洋型」(福原八郎氏「熱帶の體驗上より見たる海南島」南華(昭和十四年八月號參照)と稱される氣候的要素の中に、農業生産の基本性を見出さねばならぬのであつて、夏の濕潤期と冬の乾燥期とが周期的に變換する中に海南島の農業は生産の内容とリズムとを持つて居る事、印度洋、太平洋をめぐる亞細亞の南部及び東部地域諸國と一般である。

固より亞細亞の各地域が氣候的に夫々様子を異にする如くに、同じ海南島でも、各地域の地理的條件によつてかなり氣候が相違して居り、山脈、平野、海岸、風、水、地質等々の條件によつて各地域の生産物にも夫々特徴が見られるが、全體として見た時は、海南島に生産力の源泉を與ふるものがやはり「太平洋型」モンスーンの齎らす雨である事を認めない譯には行かない。従て其の雨に最も多く依存性を持つ暑熱濕潤地の特産物たる米が、海南島に於ても依

然第一の重要生産物である事には何等不思議とする所はない。然しその雨も度が過ぎると河川の氾濫となり、却て生産の破壊となる事日本及び支那大陸に於けると同様、海南島に於ても此の點少しも變らない。だから、昔から「黄河を治むる者は天下を治む」と云ふ言葉通り、東洋では水の支配といふ事が死活的な重要性を有する問題となつて居るが、海南島も同じ事で、先づ水利問題、即ち河川の調節といふ事が農業上からは決定的に重要問題となる所以である。

### 三 水 利

扱て水利施設の問題だが、此の點海南島には殆んど見るべきものがない。筆者の調査出張中には未だ敵地だつた萬寧縣下は水利最も進歩して居るとの事だが、之は遂に見ることが出来なかつた。然し前記中山大學の「調査報告」によると、「萬寧縣下では河川が、比較的多く貫流するばかりでなく、先年或地方民が運河を掘鑿し、附近の河水を引入れて、灌漑したことがあるが、其の後地方の有力者が、重ねて之を浚渫したから、その灌漑水量は、愈々豊富となり、又排水状態も段々改善されて來たやうである。」とあり、又實際に最近同縣下に入つた人の報告に依るも、地味肥沃で、筆者が實地に見てかなりいゝと思つた陵水平野などは之に比べると問題でないところから餘程いゝに相違ない。其の他井戸水による灌漑、河水を龍骨車により汲上げる灌漑等もあるが、是等は海南島全體から見ても極く小部分の地域に止まり、見ただけの範圍内から云ふと、海南島の大部分は水利施設も何も無い爲めに天雨を待つて農業を營んで居る状態の所が普通である。そして以前から樹木を焼却し或は濫伐した結果、現在の所南部の比較的高い山以外には殆んど水源涵養林が無く、そして河水の位置は非常に低く、然も河面は仲々廣いと來て居るから、一度雨が降り續くと洪



水となり沿岸を荒し、乾期となれば水量急激に減少する有様だから、此の水利事業と云ふ事は非常に金のかゝる又骨の折れる仕事であると思へる。然しそれだけに、之に成功するや否やが海南島開發に成功するや否やの半を決するものと思ふのである。

全般的に云つて各河川の奥の方は、特に南の陵水溪及び東の嘉積溪流域地方などは樹木よく茂り、地味も相當に肥沃な様であるが、河口に近くなる程どの河川も洪水氾濫に委せられる有様である。斯う云ふ點から見ると、海南島は全く漢人、黎人に荒された荒涼たる粗雑な自然景觀を呈して居る所であると思ふ。それ故に之を修復して經濟建設を行はねばならぬ人々の努力は並大抵でないと思ふが、手の着け易い所から徐々に始めて行けばモンスーン型氣候の特産物たる米の生産は其の自然條件が適して居る事よりみて、忽ちに本島の需要を充して更に餘剰を廣東省本土へ輸出する位の事はさして難事とも思へない。

#### 四 土 地——地 質

海南島の地味は、日本内地、臺灣等を見慣れた者には恐しく悪く見える。殊に北部一帯の海岸に沿ふ廣大な赤色砂質の草もろくに伸びない瘦せ切つた土地は、どう見ても肥沃などとは凡そ縁遠い。だからして北部だけを見て海南島へ出張したと稱する人の歸朝報告を聞くと、海南島は農業的にも駄目だと云ふ人ばかりだが、之は少し早合點し過ぎて居る。海南島の農業上から見た地質的價值は北方海岸附近に無くて奥地及び、中部、南部の河川沿岸附近にある。

筆者の見た南部方面、三亞、榆林、崖縣、籐橋、陵水、石門嶺、特に陵水より萬寧に向ふ山地邊りは植物よく繁茂し、

その樹相もかなり立派である。それから嘉積附近も相當にいゝ。文昌から嘉積に至る途中の山野にも部分的にはかなり立派な水田や畑が所々に見られた。之から判断すると、海南島は開拓可能な土地が澤山あるにも拘らず、それが全く未開拓のまゝで残されて居ると云へる。そして自ら農業國であり乍ら毎年多量の米を輸入して居る事などは前項の水利不便といふ事と共に經營の粗放性を物語るものである。だが是等の事實は何れもその根因が海南島の持つ社會的方面に存するのである。即ちその第一は土匪の跳梁であつて、是が交通の發達を阻害するのみならず、有望なる荒蕪地の開墾も不可能にし、更に農民をして耕地を放棄して逃亡する者さへ生ずるに至らしめる。第二は官吏の搾取であつて、支那の官吏は既に其の官を得る時に巨額の運動費を投じて居る爲めに、一度官に就くと頻りに人民から搾取する。官に就ても何等身分上の保障なき上に兎角その地位動搖し勝ちな所へ、一族郎黨は擧つて寄食するからしてその搾り方は並大抵でない。それが海南島となると官吏の質は尙更よくない。斯様に治安悪く、爲政者亦好機逸す可らずとして貪慾を逞ふする所に産業の發展も何も起り得やう筈はないが、是等は同島の親日政權の基礎が固まると共に次第に改善せられるであらうから、此處には海南島中比較的肥沃な所のみを拾ひ上げて列擧すれば大體次の様な所である。

#### 嘉積溪流域

#### 陵水溪流域

#### 藤橋溪流域

#### 寧源水流域（特ニ崖縣デルタ地帯）

#### 海南島調査記

## 南渡江上中流々域

此の他有望な荒蕪地の詳細な調査は中山大學「瓊崖各縣農業概況調査報告」に出て居るが、臺灣總督府外務部編「南支南洋」昭和十四年十月號に陳新座氏の譯がある。

地質、地勢に關する詳細な調査は卷末の參考書を見るといくらでも出て來るから筆者は之を省略さして貰ふ。

## 五 諸 資 源

海南島の有する自然的賦與物は、海南島の發展に重大な制約を與へる。成程海南島に缺くるもの、例へば、石炭、石油の如きは交通を手段として臺灣から或は南洋から運ぶ事によつて或程度之を滿し得る。然し乍ら海南島にそう云ふ物が有るか無いかといふ事自身が既に海南島の經濟發展の方向と可能性とを測る一つの標準になるのであつて、此の點より精密なる資源調査と云ふ事は極めて重要な意義を持つ事となるのであるが、之が達成には未だ相當な年月と努力とを必要とする。そこで現在知られて居る事、それも主として文獻と聞いた事と、實地に見た僅かばかりの判斷とを基礎にして資源狀況を述べてみるならば、

## (イ) 農産資源

海南島は「米」型の氣候を持つ所である。従て米の生産が第一に置かれねばならない事は云ふ迄もなからう。唯現在の所では、海南島の持つ芳しからざる社會機構の故に米の生産が不足して居るが、我々邦人の指導宜しきを得ば之を増産し、本島産業の太宗となす事は何でもないと思ふ。筆者が出張中に見た同島の米の栽培狀況は實に區々で、八

月といふのに田を耕して居る者あり、植付けをして居る者あり、既に實のつて居る米もあつたが穂は眞直ぐに直立して頭を垂れる事なく、それにちよぼ／＼と實が幾つか成つて居るといふ有様で、到底日本内地や臺灣などの米作状況と比較すべくもなかつた。

次は恐らく甘蔗であらう。之は臺灣と衝突するから一番適して居る南部の崖縣、籐橋、陵水、萬寧といった方面に於ては作らせぬだらうと云ふ説を聞いたが、然し筆者は適地適作主義で之も大いに増産を圖り、大陸へどしどし移出した方が産業上からも有利と思ふ。現在でも砂糖は本島農民の重要な産業の一つであり、本島最大移出品の一つであり、南部地方には殊に多く生産される。然し住民の科學的知識缺乏と、機械設備の不完全、それに農耕法に改善を加ふる事はしないばかりでなく、出來た砂糖には雜質を混ぜたりするから、色、味ともに臺灣の砂糖とは比較にならぬ。其の他には棉花も南部方面（特に崖縣邊り）ではいいと思ふが、低廉な勞働力が豊富に無いといふ社會的條件の缺如から事業採算はとれぬと思ふ。強ひて作れば、臺灣の棉花同様素晴しく生産費の高い棉になること請合ひである。

よつて之は自然的條件はよくてよく出來ても社會的條件の方から考へ、先づ試驗的試作程度に止めた方がいゝと思ふ。次に是非欲しいのは護謨であらうが、之は前にも述べた通り、英領馬來半島とは自然的條件の方に於いて大いに不利なハンディキャップがある。そして又社會的條件に於ても劣つて居る。然し彼のアダム・スミスさへもその名著「富國論」に於て云へる如くに、國防は經濟よりも重要 (Defence is more important than opulence.) だから、たとへ生産費は高くても國防上の見地から保護育成すると云ふ方針をとるならば、護謨資源は相當獲得出來ると思ふし、又その意義もある事と思ふ。從て之は國防といふ經濟外の問題が主となつて顧慮せられ、經濟は從となつて起る産業と

云へる。現在の所では東部の嘉積、西北部の那大方面が護謨栽培の最も盛んな所で、植付樹数は約二十三萬本、採液可能のもの十八萬本位といふ推定で、護謨の生産量は約二十五萬封度と稱されて居るが、固より南洋方面とは比較にならない。唯その將來性が注目されて居る。(詳細は南洋協會臺灣支部發行「海南島」三五九—三六六頁参照)

次は椰子、甘藷、落花生、胡麻、黃麻、苧麻、茶、珈琲、バナナ、西瓜、マンゴー、パイナップル等其の他各種のものが出来るが、唯現在の所何れも産額は大した事はない。詳細は既刊の調査書類に譲る。例へば中山大學教授林續春「海南島の農産食糧調査」(臺灣總督府外務部編「南支南洋」昭和十四年七月號その譯あり)。

**海棠油** 筆者が文昌より嘉積に至る途中に於て、灌漑の便甚だ悪く、殆んど水も施されず、況や肥料などは凡そ用ひられた事もない草がやつと生えて居るに過ぎぬ程瘦せた赭土の中にすくすくと十數尺の高さに並び立つて恰も護謨の實の如き青い實を附けた喬木林を見た。一體あれは何だらうと思つて側の兵隊さんに尋ねたが要領を得なかつた。然し其の後調べた所により之は海棠樹なる海南島の野生植物たる事が判明した。よつて之に就て少し述べてみよう。

海棠樹は常緑の喬木で、春に花が咲き、秋に實を結ぶ。其の實は桐油に似て居るが、實の中に仁が一つあり、非常に多くの油を含んで居るので土民は之を搾つて油を採る。搾出した油は點燈用にされて居るが又滑機油ともなし得るとの事である。そして又此の油を分解してガソリンと燈火油とを造る事が可能であるが、唯原料が安價に豊富に得られない爲めそれが企業化しないのであるが、施肥も水もやらずして全島至る所に繁茂して居るのは、想ふに海南島の土壤と氣候とが適して居るからだとして、廣東省建設廳工業試驗所年刊(民國二十六年十二月出版)は此の海棠樹に大きな期待を持つて居る。それが果して事實なら、海南島の荒野は海棠を以て覆ふ事は何でもなからうが、どうも眉唾

ものゝ様に思はれる。

尙海棠樹は熱帯植物である爲め印度等の熱帯地には廣く分布して居る。海南島では瓊山の東部、文昌、瓊東、樂會、萬寧邊りの諸縣に最も多い。

**蓖麻子油** 蓖麻子油の用途は極めて廣く、醫藥用、工業用、特に飛行機の滑機油としては無くてはならぬものである事は既に周知の事である。所で此の蓖麻は、割合に土地の瘦せた肥料も充分でない所によく繁茂繁殖するので、廣東省政府でも以前から之が試作を行つて居た様である（廣東省建設廳工業試驗所年刊、民國二十六年十二月出版参照）。それによると、崖縣附近の山や丘はその好適地らしい。その成績も、

崖縣の種 油分 六〇・一〇%

タイ國の種 六三・六八%

となつて居てタイ國産のものとの餘り大差はない。故に今や國防上の必要品となつて居る蓖麻を此の附近一帯に試作してみても、其の成績如何によつて大々的に栽培する事は極めて意義ある事と思ふ。因みに筆者の崖縣視察中にも野生蓖麻が實に多いのを目を引いた

(ロ) 畜産資源

水牛、黄牛、豚等の家畜類及び家鴨、雞等の家禽類がかなりあるが、大抵草原帯及び山野に放牧して居る。家畜は本島勞働力の不足を補ふと共に、食料用、皮革用としてかなり重要な輸出品である。例へば一九三七年度に於て牛の輸出六、四四六頭（價格二四萬六千圓）、豚は六六、一一七頭（價格一三八萬八千圓）、牛皮は四三六、五〇〇疋（價格

三〇萬二千圓)等を示して居る。(本島の總輸出額は一九三七年度に於て三五〇萬圓)

本島は灌漑治水事業の進捗と共に天然の大牧場としても充分その價值がありそうに思ふ人もあるが、熱帯の多雨な地方の草は粗剛に過ぎてミルク、バター、チーズ等を目的とする牧畜には好適でないのが通例である。然しそれらを目的としない水牛、黄牛、豚等は大いに有望である。然しそれよりもつと有利な農業の方が一般に行はれ得るから、牧畜は専ら農家の副業とする程度で澤山であらう。家禽類としては家鴨、雞が相當にある。

#### (ハ) 林産資源

之は残念乍ら現在の所あまりない。文獻には相當豊富に存する如く並べ立てゝあるが、千古不斧の大森林は小五指山邊り昌化大江流域に少し残るのみで、然も之は上流の感恩縣境の廣巴附近より下流數里の間は地下を潛流して居る爲め河川を利用しての搬出困難により残つたものである。海南島全體として見れば今後とも寧ろ植林事業の方が大事である。成程南部の山々には立派な木がよく繁茂して居るが、何れも一度伐採し或は焼いて二度目に生えた木である。と某専門家は筆者に語つたが、見た所雜木林ばかりで餘り期待出來そうにもない。家具類等細工用の硬質木には良材が多いが、日本式家屋建築用となる如きものは少ないと云ふ事である。(林種其の他の詳細は南洋協會臺灣支部發行「海南島」三七五—三九七頁及び臺灣總督府外務部發行「海南島志」二〇二—二二五頁等参照)

#### (ニ) 水産資源

近海に、特に新英港、北黎港を中心とした邊りに相當な好漁場がある。然し魚獲法幼稚で水揚げ高は大した事はない。それでも廣東省本土には年額數萬圓の移出をして居る。

**鹽業** 鹽は海南島の最も大きな輸移出品で、特に南部海岸方面で非常に多く生産されて一九三七年には一九二萬七千擔の産額を見て居る。此の大部分は大陸の方へ移出（一九三七年の總移出額八百二十萬圓に對し鹽の移出額だけで三百三十萬圓を占めて居る）されるが、是を以て直ちに海南島は製鹽の好適地なりと速断する人が多けれども、その單位當り生産費が甚だ高い點を考へると（一噸約二十圓）、此の産業は餘り樂觀を許さないものである。殊に東亞全體といふ立場から考へられた時には本島では餘り奨励されざる産業となるかも知れないのである。

（ホ） 鑛産資源

之はどれ位何があるのか、科學的な實地調査の濟む迄は分らぬであらう。支那で出て居る各種の調査書類には、各種の鑛物が相當豊富に存する様に書いてあるが、之は人をして海南島に注意を向けしめんとする政治的意圖が大分入つて居る様である。例へば瓊崖實業局長朱赤霓の前記海南島英支鐵道借款計畫中に記する所によると、全島の鑛産豊富にして殊に鐵、錫、銅、金、鉛等の鑛物は埋藏量が最も多いが、唯交通不便の故を以て徒らに地に棄てられて未だ開發せられざるのみとあるも是は例の宣傳式書方で當にならない。石炭、石油の重要燃料資源は先づ無い様である。油母頁岩も期待は出來ぬ。唯現在の所錫だけが實際に稼行され相當に有望視されて居る。榆林の奥にある田獨村の鐵鑛は、石原産業の手で今開發されつゝあるが、埋藏量百五十萬噸では、之は馬來半島ヅングン鐵山の一年か二年の採掘量に過ぎず餘りに僅少で問題にならない。其の奥にもつと豊富な鐵山のある事を希望する次第であるが、某専門家は筆者に語つて曰く「自分は未だ海南島の實地調査をやらぬから何とも云へぬが、中山大學から出て來た地質調査圖だけを見て判断するに、錫を除き此の地質では鑛物方面は餘り期待出來ない所である」と。然し民國二十四年度



瓊崖視察團の調査した鑛物調査報告を見れば相當具體的に詳しい事が書いてあるからそれ程でないかも知れぬ。

詳細は

廣東省建設廳二十六年二月印行 廣東全省鑛區一覽表 臺灣總督府官房外務部 海南島志(井手氏譯)二二五—二二三頁

南洋協會臺灣支部 海南島 三九七—四一九頁

等を参照せられ度い。

#### (へ) 動力資源

火力資源は缺けて居るけれども、地勢の關係から水力資源が南部の山地に相當豊富にあるものと思ふ。海南島の水  
力資源は百萬キロと實に氣易く云ふ人があるが、之は一體何を標準にしてそういふ事が易々と云へるのかと筆者には  
不明である。現在の所では先づ南の陵水溪邊りから小規模に着手されらしいが手の着け易い所からどしどし開發す  
べきであらう。

#### (ト) 勞力資源

生産力發展の推進力として最も大きな役割を擔ふものは勞働力であるが、豊富低廉良質な勞働力は、海南島には遺  
憾乍らない。由來廣東省は男よりも女がよく働く所であるが、海南島になると之が一層甚しい。人口が割合少い上に  
勞働能率は上らないのだから、之は本島産業振興上必ず頭痛の種となり、有るが儘の放任状態では産業發展のテンポ  
を遅らせて了ふものと想像し得る。従てこゝには特殊な勞力供給機構を考へなければ、海南島開發計劃は一大障害に  
遭遇するであらう。

海南島の蕃人である黎人（全島に約二十萬と稱せらる）は質朴着實、よく勞苦に堪えて働くので、本島の産業開發には之を利用せねばならぬといふ事を支那側でも考へて居た様だが、然し其の利用にも大きな限度があらう。

## 六 災 害

海南島には颱風と稱する程のものは來ないが、然しそれでも相當な強風が吹くので農作物をそれから保護する事も考へねばならぬ。然しそれよりも水災、旱魃の害の方が遙にひどいから水利事業が先決問題である。然し何と何つても經濟の發展には治安の維持と云ふ事が基礎をなすからして此の點より、現在の匪賊、特に共產匪の如きは徹底的に排除する必要がある。而して以上の諸災害は何れも人力を以て大いに極限し得るものであるから、その進捗と共に海南島は漸次その經濟的重要性を高め、國防的重要さと共に新興海南島は大きくクローズアップされるであらう。

## 七 結 語

以上の他に未だ交通、港灣、都市村落等の事を調べ、次で社會的側面に移つて、經濟組織や土地制度、人口關係等等其の他多くの事を調査し研究し、斯くて海南島全般に互るあらゆる産業發展に關する實行性あるプランを立てねばならぬが、其の準備計劃は夫々の専門的知識及び技術ある人達を委員或は顧問とした現地の常置機關によつて用意されねばならぬ。そして各個の事業開始及び竣工の概略の時日に就ても示される所がなければならぬが、扱て此の机上計劃を實行する段になると、海南島の現在に、自然的素材、資本、勞働力等生産の發展に不可缺の諸要素が大分缺

て居る事に氣付くであらうから、此の點に於て海南島開發の擔當者は非常な苦勞をせねばならぬだらう。嘗て此の地に貶せられた宋代の大文豪蘇東坡は、「海南の地は荒田多くして、糶稻の所産食するに足らず。薯、芋、雜穀を以て、粥を作りて、僅に之を食す」と嘆じたが、それから今日に至る迄既に九百年近くになるけれども、此の状態から餘り進歩をして居ない。だが然し臺灣が四十年にして輝しき寶庫となつた如くに、海南島も一度日本人の手にかゝると全く見違へる程の大發展を遂げるであらう事に疑問の餘地はない。本當に「二十年にして臺灣を追越す」位の島になつて貰ひ度いものである。

### 参考文献

- 海南島に關する参考文献中先づ第一に指を屈すべきは、  
 陳銘樞總纂 海南島志 民國二十二年である。  
 臺灣總督官房外務部發行 海南島志 昭和十一年（初版） 昭和十四年（再版）  
 は上記原本の井手季知太氏による譯であるが、之には各縣別の詳細な地圖を省いてある。然し臨時情報部から一つにまとめて出している。次は、  
 國立中山大學刊行 瓊崖農業概況調查報告 民國二十六年  
 臺灣總督官房外務部發行 雜誌「南支南洋」昭和十四年九月號以下に互つて陳新座氏の譯がある。  
 中國發行の雜誌としては、  
 國立中山大學瓊崖農業研究會發行 瓊農 月刊がある。次に主要参考文献を列擧すると、  
 南洋協會臺灣支部 海南島 昭和十四年

- 財団法人貿易獎勵會 貿易獎勵資料第二十三輯 海南島の研究 昭和十四年
- 南支調査會 海南島讀本 昭和十四年
- 臺灣總督府臨時南支調査局 海南島調査書
- 臺灣總督官房調査課 海南島奥地旅行報告(ディール氏の譯) 昭和九年
- 臺灣總督官房外務部 「廣東省概説」中の「海南島」の項 昭和十三年
- 南方文化經濟研究會 廈門、廣東、海南島 昭和十四年
- 臺灣總督官房外務部 海南島の農産食糧調査(中山大學教授 林續春氏筆の譯) 雜誌「南支南洋」昭和十四年七月號
- 廣東省建設廳 廣東全省鑛區一覽表 民國二十六年
- 福原八郎氏述 熱帯の體験上より見たる海南島 南支調査會發行「南華」昭和十四年八月號—十一月號
- 臺拓公司 海南島主要統計 昭和十四年
- 臺灣拓殖株式會社 海南島産業分布圖 昭和十四年
- 明細な地圖としては支那側で作製せる五萬分の一の地圖がある。